

留学生センターのホームページを知っていますか？

皆さんは留学生センターのホームページを見たことがありますか？
センターが提供するコースの紹介や時間割などが載っています。
日本語版（下図）のほかに、ほぼ同じ内容の英語版もあります。
ほかの留学生にもぜひ教えてあげてください。

日本語版 URL

<http://isc.ge.kanazawa-u.ac.jp>

英語版 URL

<http://isc.ge.kanazawa-u.ac.jp/eg/kuisc.html>



International Student Center News

金沢大学

留学生センターニュース



vol.9
September 2005



金沢大学留学生センターニュース 第9号

2005年9月30日発行

発行 金沢大学留学生センター

〒920-1192 金沢市角間町

TEL (076) 264-5188

FAX (076) 234-4043

ryuiku@ad.kanazawa-u.ac.jp



わたし りゅうがくせい
私と留学生センター

きた うら
北 浦

まさる りゅうがくせい
勝 (留学生センター長)

いま ねん まえ わたし けんきゅうしつ ほじ りゅうがくせい き かれ こくひりゅうがくせい
今から20年ほど前、私の研究室に初めての留学生がやって来ました。彼は国費留学生であつたので、当時は名古屋大学で半年間日本語を勉強しました。半年間何の音沙汰もないのは寂しく、不安ではないかと心配し、彼に一度金沢へ来てもらい、今後の研究の進め方や悩みなどを聞きました。彼の場合は、私は入国の手続きやアパート探し、保証人になることなど初めてづくしの経験をし、珍しいことは珍しいが、右往左往したことを覚えています。

いっぽう すうねんまえ きた りゅうがくせい すべ きょういく かなざわだいがく う え さいしょ ねん
一方、数年前に来た留学生は全ての教育を金沢大学で受けることができた上に、最初の1年間は国際交流会館に住むことができ、半年経って私の部屋に来たときには普通の会話に十分ついていける実力を身につけていました。初歩から上級日本語までを一步ずつ上手に教え導く留学生センターの教育訓練はさすがプロの仕事であると思えました。すなわち二人の留学生を迎え入れているその間に、留学生課（当時）ができ、留学生センターができて、われわれ専門教育の教員にとっては留学生を受け入れることに伴う手続きが驚くほど簡単になりました。このようなことしか知らない者が4月から留学生センター長に就任し、関係の皆さんにいろいろとお知らせしながらなんとか仕事を続けています。

センターに加わって分かったことは、留学生が日本語が上手になれたのは総合日本語コースや日本語研修コースなどの先生方のご指導の賜物でありました。またセンターの行事に参加して、日本語・日本文化研修コースの学生たちは日本文学や日本の伝統文化を普通の日本人以上に勉強し、理解していることも知りました。さらに、私の学科で「住民参加型公共事業デザイン支援システム開発」を研究し、学士号を取得した韓国の学生は日韓共同理工系学部留学生コースの学生であったこと、私の研究室が所有する、阪神・淡路大震災の揺れを再現できる振動台に乗り、あまりの振動にびっくりしたあの学生たちが短期留学プログラムの学生であったことも分かりました。センターには留学生の悩みに答えたり、日本で生活する上でのさまざまな相談に乗ってくれる先生がいます。日本人学生を留学させるための仕掛け、例えば海外留学フェアや国際交流月間などを考え、実行する先生もいます。

わたし わたし けんきゅう のために りゅうがく 機会 がありました。行って直ぐにカルチャーショックを受けました。相手方の先生たちはいろいろ気配りして下さったと思いますが、それすら気がつかないくらいに言葉が分かりませんでした。自分の経験を踏まえると、留学生のみなさんに対して支援するべきことが多々あることがわかります。留学生センターは国際課をはじめとする金沢大学のみなさんと協力しながら、留学生教育に本当に立つことがらを一つずつ実行していきたいと考えています。

「金沢学」を知っていますか？

「金沢学」に参加してみませんか？

○「金沢学」を知っていますか？

今から3年前の2002年度から、毎年留学生センターでは、文化体験学習講座である「金沢学」を行ってきました。皆さんの学ぶ金沢大学が位置する地域は、豊かな自然に恵まれ、古くからの歴史と伝統に育まれた文化が深く浸透した土地です。このような特徴ある地域についての学習を通して、日本や日本人に対する理解・更には皆さん各々の自文化についての認識を深めることが期待されます。

ここで、「金沢学」について簡単に定義すると、次のようになります。

「金沢学」とは、「地域に点在する有形・無形の文化的遺産・資源を集積し、その文化的価値を明らかにすると共に、それらを用いた学習活動を行い、さらには、文化の変遷を見ることにより、歴史・世代の流れを認識し、文化の継承と今後の発展を図るもの」です。

<「金沢学」を学ぶのは、どんな人たちですか？>

これまでの3年間には、金沢大学の学生の他に、広く日本全国の大都市圏の大学（国立大学11校・私立大学10校）で学ぶ留学生と日本人学生、県内の大学（石川県立農業短期大学・金沢工業大学・金沢星稜大学・金沢美術工芸大学・北陸大学・北陸学院短期大学・北陸先端科学技術大学院大学）で学ぶ留学生・日本人学生が「金沢学」に参加しました。また、学生以外にも地域の住民の方々が、学習者として、ボランティアとして参加されました。

<「金沢学」で開設されている講座の内容には、どんなものがありますか？>

金沢学は、文化体験学習に多くの時間を費やしますが、それと同時に文化体験の学問的な背景を講義により深める点に特徴が見られます。「文化体験学習」と「文化についての講義」は「金沢学」を形作る主要な2部分です。これまで取り上げた内容(科目)は、「座禅」・「茶道」・「金箔工芸」・「能楽」・「城下町(町並み)」・「庭園」・「方言」・「大樋焼き」・「和太鼓」・「祭り」・「加賀・能登の自然」・「食文化」・「友禅」・「着物文化」など、多岐に渡ります。体験と講義を通じて、より金沢という地域への理解を深めます。

<どのような日程で「金沢学」を行いますか？>

文化体験学習講座「金沢学」のもう一つのねらいは、参加者どうしの交流です。留学生とともに日本人学生や地域の方々に参加を呼び掛けているのも、金沢での様々な人々との交流が、

異文化理解の第一歩であり、多文化共生の時代を生きる人々にとって必要な出会いと考えたからです。従って「金沢学」は、週末の土曜・日曜に宿泊を入れて行きます。学習後は、参加者どうしの意見交換に入り、キャンパスでは聞くことの出来ない、率直で囚われのない発言が飛び交います。また、他大学の学生や地域の方々との交流は、留学生にとって日本での経験を豊かにしてくれるものの一つです。

<参加者たちの感想>

ここで、これ迄「金沢学」に参加した先輩留学生の感想を紹介しましょう。

- ・日本の文化に興味を持っているから、体験した時に楽しかった。もし機会があったら(また)参加したい。
- ・このような活動を通して、留学生たちに日本の伝統文化を深く理解させた。一緒に参加した日本人の学生たちは、自分の(国の)歴史や優秀な文化がさらに理解出来る。また、一緒に勉強した時にさまざまな国からの人は他の国の人と交流するチャンスがあるから友達になれるし、異文化が理解出来る。「金沢学」のような活動は、本当にいいと思う。以下省略

また、日本人学生・学習者またはボランティアとして参加された住民の方々は次の様に述べています。

- ・私はこの金沢で生まれ育ち、留学生や県外の学生に比べて文化に接する機会が多いはずなのに、ほとんどとっていいほど、金沢について知らずにいました。－(中略)－毎日いる土地については自然とそれなりの知識がつくため、あえて調べようとはしなかった事が原因でしょう。私がこの企画に参加した理由はそこにあります。今回の体験ではさらに留学生や県外の方とのふれあいも含め、予想以上に良い経験ができたと思います。(日本人学生)
- ・知らなかったことばかり……。ただただ、感謝感激です。(地域住民)
- ・学問的指向がいいと思う。素晴らしかったと満足しました。良い金沢学がずっと続くよう祈ります。(地域住民)



加賀友禅伝統産業会館にて

○「金沢学」に参加しませんか？

2005年度の「金沢学」では、夏コースが既に終了しています。（7月2～3日）

夏コースでは参加者が加賀友禅の型染めや金箔貼りを体験し、着物文化に関する講義を受講しました。また、金沢市民ボランティア「まいどさん」の案内で、兼六園・金沢城公園の詳しい説明を受けながら散策し、古都金沢への理解を深めました。

しかし、秋コース・冬コースの実施はこれからです。

秋コースは、11月5日（土）～6日（日）に行います。

金沢湯涌創作の森にて本格的な染物に挑戦する予定です。

また、冬コースは12月17日（土）～18日（日）に行います。

室内でできる食文化についての学習を主として行う予定です。

一緒に楽しみながら金沢への理解を深め、さらには皆さんの自文化について認識を深めませんか。

参加希望者は、日程が近付いたら、学内の掲示物を注意して見ていてください。

また参加者は、申し込み順ですので、早めに予定を立てておいてください。

なお、金沢学の問い合わせ先は下記の通りです。

金沢大学 留学生センター（担当者：毛利）

TEL 076-264-6195 / FAX 076-234-4043

E-mail : ryuku@ad.kanazawa-u.ac.jp



まいどさんと兼六園にて

こく さい きょう いく けん きゅう ぶ もん
国際教育研究部門

English Today 4 Weeks

(タフツ大学夏期英語研修プログラム)をご存知ですか？

金沢大学の交流協定校の一つであるタフツ大学のサマースクールでは、金沢大学の学生を対象に、4週間の夏期英語研修プログラム (English Today 4 Weeks, 以下 ET 4) を実施しています。ET 4 への本学学生の参加は、今年度 (2005年度) が2度目です。今年度は、7月17日 (日) から8月13日 (金) までの4週間の学習プログラムに、学部1年生からM1までにわたる6名の学生が参加しました。今回私は、出国から9日目まで彼らに同行し、授業やその他のアクティビティに参加しました。また、サマースクールとET4のディレクター、授業担当の先生方、タフツ大学の派遣留学担当の先生方にお目にかかり、本学との今後の学生交流についてなど、いろいろなお話をうかがう機会を得ることもできました。私がこの夏タフツ大学で見たり聞いたりしたことで、みなさんにお話ししたいことはたくさんありますが、限られた文字数では言い尽くすことはできません。ですから、ここではET4の学習内容その他を簡単にご紹介しようと思います。

アメリカ合衆国マサチューセッツ州ボストン市郊外に位置するタフツ大学 (Tufts University) は、1852年に設立された、学生数8,500名、教職員数3,500名を有するアメリカを代表する私立大学の一つです。1996年の交流協定締結以降、本学とタフツ大学は、学生交流を始めとする様々な活動で、交流を深めています。

ET 4 は、毎年7月中旬から8月中旬までの4週間、タフツ大学サマースクールが実施する英語研修プログラムで、次の4種類の授業 (アクティビティ) から構成されています：まずコア・コース (Core Courses)。月曜日から金曜日までの週5日間、午前中に開講されるクラスです。学生は能力別の少人数クラス (14人以下) に分かれ、熟練した教師の指導のもとで、speaking, listening, reading, writing の基本的なスキル上達を図ります。次に選択コース (Elective Courses)。コア・コースと同様に、月曜日から金曜日までの週5日間、午前中の開講です。学生は、時事問題、アメリカの文化、ボストンの歴史と文化、TOEFL 対策などのテーマのもとに開講される複数の授業から、一つを選んで受講します。三つ目が水曜日を除く毎日の午後に関われる能力別のワークショップ (Afternoon Intensive Workshop)。学生はこれに参加し、発音、英作文、読解、英語でのスピーチや議論のしかたなどを集中的に訓練します。そして最後が毎週水曜日の午後のディスカバー・アメリカ見学ツアー (Discover America Excursions)。ボストン市法廷、歴史博物館、近郊の名所旧跡などへの見学ツアーに出かけます。

ET 4 参加学生は、RC (Residence Coordinator) と呼ばれる数名のアメリカ人学生 (通常タフ

ツ大学生。今年度は名門ブラウン大学の学生も含まれていました)と一緒に寮に住みます。(食事は毎食キャンパス内のカフェテリアでとるのですが、その内容については「賛否両論あつて然り...」と私は思いました。) RCは、24時間体制で、ET4参加学生の日常の問題解決や悩み相談、宿題のチュータリング、週末のデイトリップの企画・案内などをしてくれるのですが、これが至れり尽くせりなのです。今回私は、それを目の当たりにし、タフツ大学の底力に圧倒された思いです。そして何より、タフツ大学のホスピタリティーに心より感謝したいです。

タフツ大学は、本学との今後の調整により、参加学生の専門分野に対応した英語訓練コースや正規派遣留学のための準備コースをET4カリキュラム中に導入するなど、本学学生のニーズに合わせたやり方で、ET4を発展させていくことを考えてくれています。また、2005年度より、ET4での学習に単位認定がなされていますが(共通教育言語科目「英語C」2科目または法学部開講科目「外国語表現法(英語)」に履修登録することにより4単位が認定される)、これも、ET4のグレーディングに本学の成績評価スキームを積極的に採用してくれるという、タフツ大学の協力があることです。

本学が、教育・研究とその環境のさらなる国際化を目指していく中、協定校との学生交流、研究協力は、一刻一刻と盛んになっていくでしょう。そしてその中で、毎年夏のタフツ大学へのET4派遣も、今まで以上に重要な役割を担うことになるかと予測されます。タフツ大学と本学が協力することにより、今後のET4派遣が「数」と「質」の両者において発展することで、両学の絆がますます強くなっていくことに疑いの余地はありません。

ET4に関して詳しい情報を知りたい人は、ぜひ筆者までご連絡ください。

(saiki@kenroku.kanazawa-u.ac.jp, 264-5527) 国際教育研究部門：齊木麻利子



左からオリヴィエくん(フランス)、
金大生の堀くんと古田くん。



左から貝淵くんと清島くん。
カフェテリアにて。



法学部3年生の小森さん



左から筆者、タフツ大学スマースクールのディレクター、ポールさん、ET4ディレクターのジョディーさん

につかんきょうどうり こうけいがく ぶりゅうがくせい
日韓共同理工系学部留学生コース(通称:日韓プログラム)

だい き せい むか
第6期生を迎える!

につかん だい きせい だい きらい じょせい こうがくぶ にんげん きかいこうがつか
日韓プログラム第6期生は、第1期以来の女性がやってきます。工学部人間・機械工学科に
はいち
配置の白美娜(ペク・ミナ)さんです。

しゃしん ねん がつ かんこくがわ よびきょういく はじ よびきょういくじっし きかん キョンヒだい
写真は2005年3月に韓国側の予備教育が始まってまもなく、予備教育実施機関である慶熙大
がっこうこくさいきょういくいん ペク ほうもん しゅしん ペク むか いちじ きこく
学校国際教育院に白さんを訪問したときの写真です。白さんを迎えるために、一時帰国してい
かなざわだいがく にっかん せい めい きせい めい きせい めい きせい めい きせい めい あつ
た金沢大学の日韓プログラム生5名(3期生2名,4期生2名,5期生1名)が集まってくれまし
た。



ペク ミナ みぎはし かこ かなざわだいがくはいち にっかん せい めい
白美娜さん(右端)を囲んで、金沢大学配置の日韓プログラム生5名と

おな じょせい ことしほんがく だいがくいん し ぜん か がくけんきゅうか しんがく きせい シンドンミ
同じ女性ということで、今年本学の大学院自然科学研究科に進学した1期生の申東美さんに
せいかつめん そうだん
生活面でのいろいろな相談にのってもらえそうです。また、配置先の人間・機械工学科には3
きせい ウーソンヒョンくん せんぱい
期生の禹承賢君が先輩としてアドバイスしてくれることでしょう。

ざんねん だいき はいち めい だいき た えることなく つづ
残念なのは、第6期の配置が1名だけだったことです。第1期から絶えることなく続いてい
うけい こんご けいぞく ことし かんこくごばんしきく おこな かなざわだい
る受入れを今後も継続させていくため、今年ホームページの韓国語版試作を行って、金沢大
がく かん じょうほう かんこくがわ にゅうしゅ さぎょう おこな よてい
学に関する情報を韓国側から入手しやすいようにするなどの作業を行う予定です。

たんとう おおた あきら にっかん たんとう
担当: 太田 亨(日韓プログラム担当)

大学院予備教育 (日本語研修コース)

10周年を迎えた日本語研修コース (大学院予備教育)

留学生センターが金沢大学に設立されたのは1995年です。今年で10年になります。

日本語研修コースは、1995年の10月に開始され、後期に1期生を、今年2005年の前期に20期



生を迎えました。10年間の在籍者数 (第1期～20期) は、181人にのぼります。

この原稿を執筆している8月は夏休みです。20期生たちは1ヶ月弱の夏休みを楽しみながら、9月の修了発表の準備をしています。

このコースはコースマスター (三浦) をはじめ、担当教員の顔ぶれが、この10年間そんなに変わっていません。担当が変わらない故の停滞という弊害もある一方で、ステキなこともあります。それは、第1期生から20期生までのコー

ス生たちの顔も名前も人柄も成績も、それぞれについての思い出が、コースマスター (三浦) をはじめ、担当した先生たちの頭と胸の中に、ぎっしり詰まっていることです。

記念すべき第1期生は、研究留学生1人 (インド)、教員研修生4人 (ミャンマー、メキシコ、フィリピン、中国) でした。冬を真近に控えた10月半ばに開講式を行いました。教師も学生もはじめての金沢で、鉛色の寒い冬に心細い思いをしながら、寄り添って毎日を過ごしました。5人中4人が寒さを知らない国から来たので、寒さ対策を教えるのも大変でした。たとえば、服の着方です。セーターは直に肌に着けるのではなく、まず下着かシャツを下に着ること、セーターの上にはジャケットかコートを着て風を通さないようにすること、スポンも、冬には肌には直に着けないで、ズボン下というものを着けること等、金沢では誰もが普通に何気なく行っている習慣を、全く未知のこととして教える必要がありました。最近では情報が簡単に手に入るようになったせいか、下着問題に悩まされることも少なくなりましたが。

この10年間、珍しい病気にも驚かされました。国の川魚の体内にいた寄生虫が、その魚を食べた留学生の体内で動き回ったり、国で罹ったマラリアを金沢で発症したりするケースもありました。

10周年記念シンポジウム：『専門領域でのサクセス』に貢献する大学院予備教育

研修コース設立10周年に当たって、8月25日と26日に記念行事を行うことになりました。海外・国内在住の修了生を招待して、修了生によるシンポジウムを開催し、併せて、日本語能力追跡調査を行います。そして、その成果を今後のコースのあり方と日本語教育の方向性への参考とします。キーワードは、日本語教育、専門性、サクセス（学位、大学への就職）です。シンポジウムの発表者は、海外、日本国内の大学や政府機関で活躍しているコース修了生4人です。シンポジウムと懇親会には、歴代センター長、教員、修了生、VOTAK（ヴォランティアチューターの会）、地域で支援して下さる方々をお招きして、有意義で楽しい時間したいと思います。

日本語研修コース担当：三浦 香苗



日本語・日本文化研修コース

日研究生と日本人学生の合同調査研究

2000年秋学期から日本語・日本文化研修留学生（以下、日研究生と略す）専用の必修科目として開講してきた調査実習科目を2005年春学期から教養科目としても登録し、日本人学生にも正式に開放しました。教養科目としては「留学生との合同言語・文化調査実習Ⅰ・Ⅱ」という科目名で登録されています。

調査実習科目のそもそもの開講目的は、日研究生に研究方法論を教え、その実践の機会を与えることでした。2000年の開設当初から現在に至るまで日本人学生も非公式の形で授業を履修し、日研究生との合同調査研究を行ってきました。より多くの日本人学生に留学生との共学の機会を提供する目的に日本人学生にも単位の出る授業としても改めて正式に開講したわけです。

この授業では、日研究生と日本人学生から成る混合グループを形成し、それぞれのテーマについて合同調査研究を行い、その成果発表を行います。段階的に導入していく方法論を、それぞれのグループで、実践しながら、身に付けていくことが授業の狙いです。各グループで問題提



起をし、その問題を解明するための調査を考え、実施し、データを収集・分類・分析・考察した上で、最終発表を行います。



グループは、学部学生にとって不可能な域にあるかの如く思われている「研究」に対する心理的不安感を除外し、一方、留学生と日本人学生の組み合わせは、それに更に、多言語・多文化の様々な新発見や視野を広める可能性という楽しみを加え、不可能を可能にしてくれます。留学生教育の視点に立てば、日研究生は既にかの日本語運用力を有しているとは言え、外国語での論理的思考やそれに必要な語彙、背景知識に欠けていると思われま。日本人学生とのグループ作業は、それらの困難さを取り立てて意識させずに、自然に必要な語彙や知識を獲得し

ていける環境を提供していると考えられます。一方、日本人学生や中国学生の場合、方法を提示すれば応用していく能力に長けているものの、自ら促進して課題解決方法を見つけなければならない状況下では戸惑ってしまう一般的な傾向性が見られます。その上、事柄に対する意見提示による議論の構築の仕方にも日本人学生は慣れていないとは言えません。これらの点において、留学生がリーダーシップを発揮し、グループ作業を進めてくれる面があり、相乗効果が生まれます。



この調査実習科目の最大の特徴は多言語・多文化の環境であると言えます。その環境を生かすため、テーマは多言語・多文化に関わるものを取り上げており、本年度は、次の四つについて調査研究が行われました。

- 「若者と家族のコミュニケーション」
- 「男女関係とその意識——ヨーロッパとアジアの比較——」
- 「日本語における誉め言葉とその使用条件」
- 「『雨』に関する表現を通して見た日本人の自然観」

それぞれのグループで実態や意識を明らかにするためにアンケート調査や文献調査など行われました。グループ作業の中で、分析基準を決めながら、分担作業で分析・考察を行い、全体をまとめながら、一般・抽象化するプロセスを行いました。

異文化に対する発見もさることながら、自らの言語・文化についての発見も多かったのではないかと思います。それは、自文化を客観化する過程の中で生まれた発見であり、また異文化との対比において捉えることにより、明らかになったものとも言えます。

共学の最大の目的である教育的相乗効果の実現、知的交流は図れたと思いますが、教室内で始まった交流は授業の枠に止まることなく、文化間の相互理解としてというよりは寧ろ、大学生同士の友情へと発展し、個人のレベルで深く根を下ろしながら、確実に広まっていく相互理解へと発展してほしいと願って止みません。

日本語・日本文化研修プログラム担当 ルチラ バリハワダナ

かなざわ だいがく たん きりゅうがく 金沢大学短期留学プログラム (KUSEP)

き ちゅう りゅう がく せい かつ 貴重な留學生生活



Heil, Hadrian

フランス、ナンシー第一大学

日本へ来る時には日本の生活と文化を全然知りませんでした。われわれ留学生たちは色々な国々から来て、一人一人違う性格であり、本質的に異なる集団でした。日本へ来る理由も違っていたし、個々の学科の目的も様々でしたし、それにそれぞれの得意点もほかの分野にありました。ですけれども、日本の生活に皆同じくチャレンジしましたので、全員には同じ目標がありました。というのは、まず日本に慣れて、できるだけ学んだり、楽しんだりすることでした。成功したでしょうか。どんなところが特によかったですか。

先生方のおかげで、日本語を全然話せなかった人はどんどん話せるようになって、すでに国で勉強してきた人はますます上手になりました。そして、日本語の授業だけではなく、日本語があまり分からなくても、面白い活動がいっぱいありましたから、寂しいと思う時間はありませんでした。時々時間的に大変でしたが、大変な勉強でも楽しかったです。

国際交流会館に住むこともとてもよかったです。便利な部屋があるし、大学から近いし、コモンルームという皆のための部屋で集会もできるし、とても住みやすいです。会館に住んでいる人と料理を作ったり、話したり、ビデオを見たりすることはとても楽しかったです。休み中はいろいろな人と旅行に行き、日本中の有名な場所を見てきました。友達と一緒に旅行するほうが楽しいです。

時折、特にはじめのころ、日本の社会は、私たちにおかしい印象を与えました。たとえば、日本人は親切なので、失礼にならないように、おいしくないのにおいしいといたりします。無理だと分かっているのですが、誰でもそうしますから、私もそうしなければならないと思っています。それは、外国人にはよくないという印象を受けるかもしれませんが、私は悪いところだということに違ふところだといったほうが良いと思います。こういう事とお互いに理解するためには、KUSEPのようなプログラムが理想的です。

今、このレポートを書くときには、もうすぐ国へ帰らなければいけません。留学生たちの間にできた友達はもう何人かは帰ってしまいました。友達が少なくなるのを見ると寂しさがひしひしと胸に迫ります。

こういう寂しい気持ちですが、日本で生活ができる一年間を与えてもらったことに感謝したいと思います。自分にとっていい経験でした。

姚 紅 (ヤオホン)
中国、北京師範大学



月日の経つのは速いです。去年10月から、私は日本留学の一年間を過ごしました。長いような、短いような1年でした。振り返ってみると、この1年間は私の人生にとって、かけがえない貴重な1年間でした。

金沢大学短期留学というプログラムに参加したほかの留学生と比べて、私は日本に来る前日本語を6年間勉強していましたが、日本に来てから、自分の日本語がまだ足りないというのを痛感しました。学校で習った日本語と実生活で使われる日本語とは違ってきますから。幸いなことに、このプログラムは留学生のレベルによって、日本語のクラスをAからFまで設置しています。担当の先生方はクラスでビデオや新聞紙や録音テープなどを使って、留学生の日本語「聴く、話す、読む、書く」能力を向上させるように教えてくださいました。印象深いのは、Fクラスで「自分の国の文化」について口頭発表したことです。

発表の前、先生から発表の原稿を何回か直していただきました。日本語で発表するのははじめてではなかったのですが、発表の時にやはり緊張しながらパワーポイントを使って中国のお茶文化を紹介しました。私達留学生にとって、このような授業を通して、日本語能力だけでなく、緊張感の中から育てられた達成感や自信は一生貴重な財産だと言えるでしょう。

また、私にとって日本留学は興味をそそると同時に挑戦的な経験でした。私は一人っ子ですから、小さいころから家族に甘やかされて、あまり家事をさせられたことがないです。しかし、日本に来て、自分で料理をつくったり、部屋を掃除したりして、本格的な一人暮らしをしてみました。もともと料理が全然だめだった私は今餃子や鳥の手羽先焼きなど得意料理がいくつか出来ました。そして、今までずっと学校にいて就職したことのない私は日本でアルバイトをやってみました。去年大雪が降った時、私は一人で傘を差しながら雪の中を歩いてバイト先に行きました。寒くてひどい風邪になったり、両手が霜焼けになったり、雪の中に転んでしまったりしてとても大変でした。しかし、アルバイトでいろいろな日本人と接触することによって、もっと深く日本社会や日本人生活を体験することが出来ました。そして、大変な時でも一人だったから、何となく強くなれた気がしました。自分に自信がついてからの生活はとても楽しいものになりました。すごく良い経験をしました。

一年間の中には、失敗したことや、悲しかったことや、辛かったことなどたくさんありましたが、それ以上に嬉しいことや感動することの方が多かったので、金沢大学に来て良かったとすごく感じています。辛い経験をするからこそ気付くことがあるので、毎日毎日考えながら後悔しないように生活しています。悩んだ分だけ自分にプラスになって返ってくる事を、ここに来て実感しているので、これからも頑張り続けたいと思います。これから我々がすべきことは、日本の社会や文化の良いところを吸収し、それを自分の国に適用するか、このような豊かで調和的な文化と直接に接触できるチャンスのない人々に紹介することです。

最後に、留学生センターの皆さん、指導して下さった先生方にこの一年間いろいろお世話になって、心から感謝の意を表したいと思います。皆さんのおかげで、とても楽しい留学生生活を過ごしました。本当にありがとうございました。

相談指導部門

留学生の皆さんにお知らせしたいことが3つあります。

その1. 「金沢学」に参加してみませんか？

秋から冬にかけての金沢は、暗い雲・寒い気候・雨やみぞれや雪が舞い散る季節になります。自分の国を離れている留学生の中には、何となく寂しく孤独を感じる人たちもいるでしょう。暖かい日射しの国から来た留学生は、とりわけ太陽が恋しく思われるでしょう。そんな時こそ、「金沢学」に参加し、日本の文化について学習すると共に、様々な国から来た留学生・日本人学生・地域に住む日本人の人々との交流を深めてみませんか？大学とは違った経験や人的ネットワークが、皆さんの留学経験を豊かにすることは間違いありません。また、文化について体験を通して学ぶのですから、心が少し元気を回復します。寒く・寂しい季節だからこそ、金沢学に参加し、学習し交流を深めましょう！

その2. 交通事故に注意しましょう！

運転をする際には、必ず2種類（自賠責保険・任意保険）の保険に入りましょう！！
事故直後には、必ず警察に連絡すること！！！！

残念ながら、留学生の交通事故をしばしば耳にします。事故の被害者であれ、加害者であれ、その解決には多くの時間と費用と精神的なダメージが伴います。留学生の皆さん、事故にはくれぐれも気を付けて、安全運転を心掛けてください。特に道路が滑ったり凍ったりする冬場は、運転には慣れていないはずの日本人でさえ、怖い季節です。従って、万が一に備え、自動車保険（自賠責保険・任意保険）には必ず加入してください。

また、不幸にして事故にあった時には、一人で考えていないで、警察に連絡し直ちに近くの日本人（指導教員・同じ研究室の人々・チューターなど）と連絡をとってください。

なお、詳しい事は、留学生センターや教務係のスタッフに聞いてください。

その3. 相談やアドバイスをする新しいスタッフを2人紹介します。

・佐藤 実先生
総合教育棟2階の留学生相談室で毎週木曜日（10～12時）、中国語による相談とアドバイジングの担当です。もちろん、日本語による相談も受け付けています。

・苗田敏美先生
主として自然研の留学生の日本語を中心とした学習相談やアドバイジングを担当しています。

< プライバシーは、固く守られますので、困った事があったら、早めに相談しましょう！ >

総合日本語コース

小立野キャンパス移転に伴う日本語授業の廃止について

小立野キャンパスは平成17年度後期から、角間キャンパスに統合されます。留学生センターはこれまで、総合日本語コースの授業を角間・小立野両キャンパスで行ってきましたが、このキャンパス統合により、小立野キャンパスでの授業を廃止することにしました。

総合日本語コースが角間キャンパスのみでの開講になったことで、留学生センターではプログラム改編を行います。後期からの総合日本語コースにご期待ください。

なお、医学部に所属する学生は宝町キャンパスが移転しないため、日本語授業を受けるには遠い角間キャンパスまで通うしか方法がなくなりました。医学部の学生だけに授業を設けることは予算などが関わり大変難しい状況ですが、遠隔授業の導入の可能性も含めて今対策を考えているところです。ご不便をおかけしますが、どうかご理解いただきたいと思います。

小立野キャンパスの日本語教室は私たち日本語の教師にとっても思い出の多いところで、その日本語教室がなくなるのは寂しい限りですが、秋から新しいプログラムの下、角間キャンパスで皆さんにお会いするのを楽しみにしています。

総合日本語コース上級クラスの実験

「総合日本語コース」上級クラスでは、毎学期、留学生が授業の課題として書いた作文をまとめて文集を作っていますが、その中の一つ：エストニアのマーリヤ・ヤーニツさんの作文を紹介したいと思います。

マーリヤ・ヤーニツさんは日本語・日本文化研修生として2004年10月に来日し、まもなく金沢大学での勉学を終えて帰国します。母国の大学での専攻は分子生物学です。



日本人だと実感した人

マーリヤ・ヤーニツ (日本語・日本文化研修生)

石の門をくぐって寺の庭に入るといつも、何と静かなのだろうかと感じる。お寺の屋根の下で毎日の生活をしていて、この場所を自分の家としているお坊さんではない人がいるということは、普通は考えられないだろう。しかし、広瀬さんは禅仏教の曹洞宗のお坊さんの奥さんとして、ちょうどそのような毎日を生きてきたのである。

お坊さんの奥さんの生活は例えば普通のサラリーマンの家と比べてどんなところが違うかと言うと、それはやはり長く出かけられないことである。夫はよくお参りに行ったり、他のお寺で泊まったり、いろいろな式を行ったりしているので、そのときのお寺の世話は奥さんの仕事になる。広瀬さんのことばで、「お寺ってというのは、いつも誰かがいるというイメージがある。それが気になって、親戚や友達の家泊まったり、遠くまで旅行に行ったりすることはなかなかできない」。また、お庭の仕事を責任を持って毎日毎日やると手や顔が日焼けしてしまう。こんなところでも普通のサラリーマンの奥さんと違って来るそうだ。

朝は毎日お寺のつとめ、すなわちお経を読むことで始まる。理想的に言えば、それは毎日家族の皆でやることだけれども、病気になった場合などはできない日もあるそうだ。または子供がもう家から離れる年になると参加しない。つとめの後広瀬さんの一日は、庭で働いたり、買い物をしたり、家事をやったりして普通の主婦の生活とあまり差がない。甘いものも大好きだし、洋服を見るのも好きだし車でスピードを出すのも好きだ。

自分は何を一番大事にして生きているかと聞くと、答えは日常の些細なことであった。「一番あたりまえの簡単なこと、食べられて、便通がちゃんとあって、朝起きられて、歩いて…あたりまえすぎて感じないことがすごくありがたい。」広瀬さんは小さいころ肺病で長い間病院に通っていたので、そのようなことの大事さをよく感じているということだ。そのとき宗教には特に興味を持っていなかったのだけれども、宗教に興味を持ち、よくお参りにいったりお寺に通ったりしているお父さんの姿を見て育った。それで自分の人生が宗教の中で生きていくことは憧れだった。自分の子供にも、自分が育ってきたと同じように、正しいと思う生活を日常的に生きている親の姿を見て育ててほしい。言葉で教えるだけでなく、教えや考え方を実行して伝えてほしい。つまり、言葉より心で、体で習うのが大事だ。広瀬さんが言ったのは、もし自分が頑張って毎日自分が信じていることに従って生きていけば、その信じていることは次の時代でも生き続けて、次の世代でも信じ続けて伝わっていくはずだということである。

それは多くの日本人の考え方ではないだろうか。自分が頑張っていると自分が信じている生活さえすれば、世界が分かってくれる、認めてくれる、ということは興味深い考えではないだろうか。



JAPAN TENT 2005年



加賀万歳体験

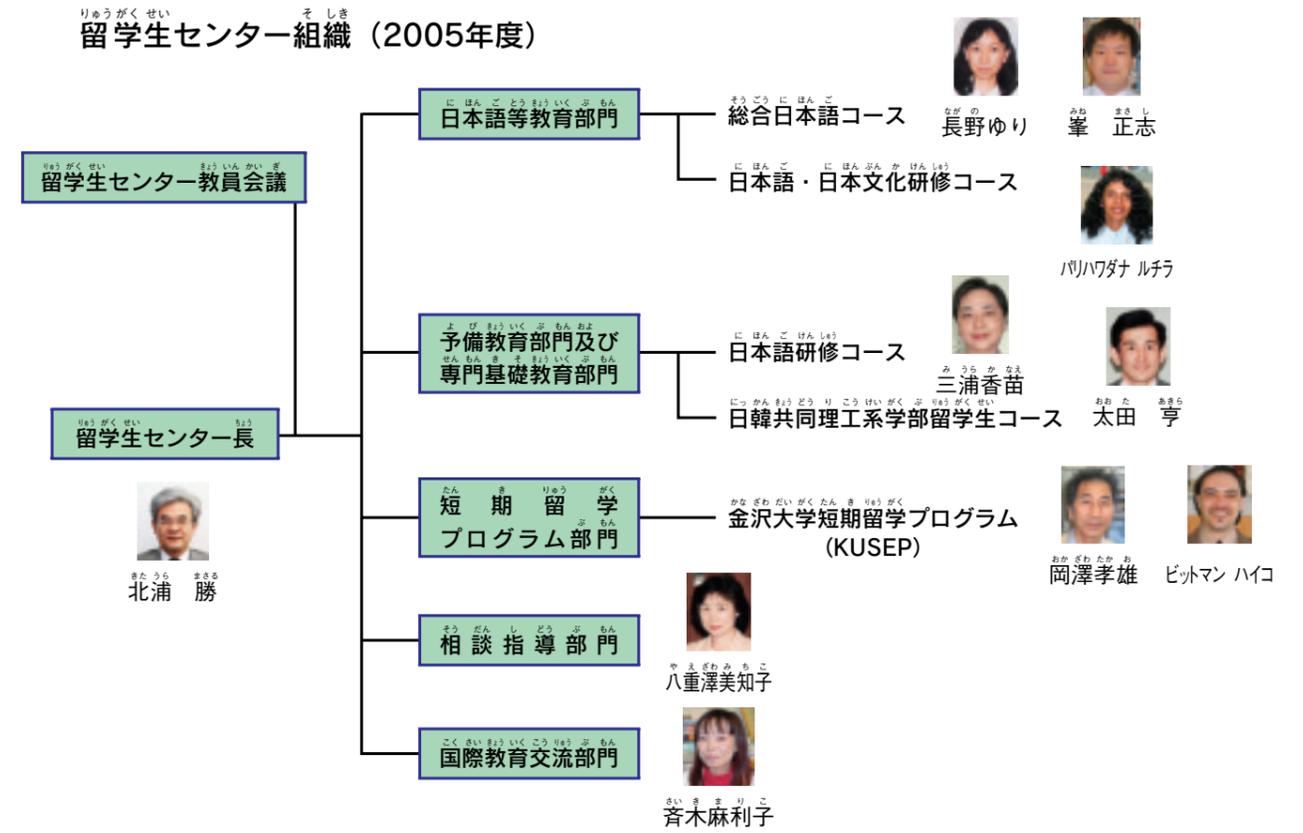


実地見学旅行



和服体験

留学生センター組織 (2005年度)



国際課組織 (2005年度)

